

第3回アフリカ・モラル・エコノミー国際シンポジウム

「モラル・エコノミーの地域間比較 アフリカと東南アジア」

なか やま せつ こ
中 山 節 子

はじめに

シンポジウムの概要
各セッションの内容
今後の課題

はじめに

2006年10月7日～10日の4日間、福井県福井市および越前市において、国際学会AMEA (Association for Moral Economy of Africa), 研究プロジェクト「赤道アフリカ農村におけるモラル・エコノミーの特質と変容に関する比較研究」(代表:杉村和彦), および福井県立大学等3者が主催する国際シンポジウム「第3回アフリカ・モラル・エコノミー国際シンポジウム『モラル・エコノミーの地域間比較 アフリカと東南アジア』」(3rd International Conference on Moral Economy in Africa. Comparative Perspectives on Moral Economy: Africa and Southeast Asia)が開催された。本稿では、4日間の国際シンポジウムでの研究発表およびそれらをめぐる議論について、プログラムにしたがって報告する。その前に、AMEAおよび実質上の主催者である研究プロジェクトについて紹介する。

本研究集会を主催するプロジェクトとは、

『アジア経済』XLVIII-3 (2007. 3)

2003年度より始まった日本学術振興会の助成による基盤研究(A(1)海外学術研究)の研究プロジェクト「赤道アフリカ農村におけるモラル・エコノミーの特質と変容に関する比較研究」(代表:杉村和彦)である。研究集会の中心となったのは、同プロジェクトの研究分担者を軸とした研究会のメンバー、および2度の国際会議(注1)へ参加した海外研究者を基盤として組織化された国際学会AMEA(Association for Moral Economy of Africa)である。

本研究集会の成果は、今後プロシーディングとして公刊するほか、数編の論文を束ねて『アフリカ研究』の特集に収めることがすでに決まっている。ほかにも『農林業問題研究』、『文化人類学』などの国内学会誌や、タンザニア・ダルエスサラーム大の機関誌に論文を掲載し、さらに世界的な研究者を執筆者とする『アフリカ・モラル・エコノミー』に関する共同著作を英文・邦文で出版する予定である。

本論に入る前に筆者の立場を述べておく。筆者は同プロジェクトの主要企画に出席するのは今回が初めてであるため、周縁的な立場からの報告にならざるをえない。「はじめに」および第

節の「シンポジウムの概要」は代表者杉村氏の文章にほぼ全面的に依拠した。第節の各報

告の内容は報告者の論文や配布資料を筆者が要約したものである。筆者の見解はおもに第 節「今後の課題」に現れている。つぎに会議の開催趣旨とプログラムを紹介する。

シンポジウムの概要

1. 趣旨

アフリカ諸国に対して、国際機関や各国政府の援助協力が続けられているが、援助対象となっている途上国のなかにおいてアフリカ農村の停滞ぶりは突出したものとなっている。商品経済が浸透する一方で、農業生産の近代化がなかなか進まない背景に、アフリカ農村に独特の農民経済の原理があることは、今日世界中の研究者と援助関係者が認めるところであり、その解明が緊急の課題となっている。こうした現状認識に基づき、本研究集会では生存維持権と互酬性規範を中心としたアフリカ農民のモラル・エコノミーに着目した。農村の動態の要因を地域間比較の視点から検討し、上記の課題に答えようというのがねらいであった。

メイン・テーマであるモラル・エコノミーは非常に複雑な現象であり、経済学、農業経済学、農村社会学、歴史学、文化人類学、経済人類学、生態人類学などさまざまな分野からのアプローチを必要としている。これらのテーマに関心をもつアフリカ研究者が一堂に会することは世界的に稀であり、この機に研究者間のネットワークを設立されたことは、モラル・エコノミー研究の進展に非常に重要であろう。

本研究プロジェクトでは、これまでアフリカ内部での地域間比較を行ってきたが、それに続いて固有の動きを示す東南アジア諸地域との比

較を含めて研究の進展を図っている。そうした研究過程において、同じ「小農」社会でありながらも、極めて対照的な社会的性格をもつ日本の「小農」社会の位置づけの重要性への認識が、国内外の研究者の間で共有されてきている。こうした経緯をふまえ、とりわけ多くの海外研究者が出席する今回の国際学会を、福井県で開催したことの意義は大きい。国際学会での議論の過程で、アフリカ・東南アジア・日本の「小農」がもつモラル・エコノミーの独自論理を検討するとともに、学会後に海外研究者とともに福井県今立町でのエクスカージョンにより、「地域」がもつモラル・エコノミーが現代世界に与えるインパクトを国際的にアピールすることを視野に入れたものである。

つぎに4日間にわたるプログラムを紹介する。

2. プログラム

1 日目：2006年10月7日（土）

於：福井県国際交流会館（福井市）

< 基調演説 >

座長：ディオグラティアス・F・ルタトーラ
(Deogratius Rutatora)

(1) デボラ・ブライソン (Deborah Bryceson, オックスフォード大, 英国)

「東南アジアとサハラ以南アフリカにおける富と繁栄の分かれ道」

(2) 西川 潤 (早稲田大学)

「生存維持から内発的発展 / 国民総幸福量 / 社会的経済へ グローバリゼーション下における対抗パラダイムの変化」

< シンポジウム > アフリカ・モラル・エコノミー論をめぐる現代的パースペクティブ

司会：イザリア・S・キマンボ (Isariah N. Kimambo, ダルエスサラーム大学, タンザニア)

< 基調講演 >

(1)ゴラン・ハイデン (Goran Hyden, フロリダ大学, アメリカ)

「情の経済とモラル・エコノミー われわれは何を学んだか? 」

(2)杉村和彦 (福井県立大学)

「アフリカ小農とモラル・エコノミーの歴史的位相」

(3)ディオグラティアス・F・ルタトーラ (ソコネ農科大学, タンザニア)

「アフリカにおけるモラル・エコノミーの再発見 2004年と2005年の会議をふまえて」

コメント：北原 淳 (龍谷大学)

パネリスト：マルク・アンベール (Marc Humbert, レンヌ第1大学 - PEKEA, フランス), ポーパン・ウイヤーノン (Porphant Ouyyanont, スコータイ・タンマティラート大学, タイ)

2日目：2006年10月8日(日)

於：生涯学習センター今立分館 (越前市)

[PEKEA (Political and Ethical Knowledge on Economic Activities) セッション]

座長：嶋田義仁

1. A・ロベール・フルヴィル (Robert Frouville, レンヌ第1大学 - PEKEA, フランス)

「モラル・エコノミーと社会発展」

2. ミシェル・ルノー (Michel Renault, レンヌ第1大学 - PEKEA, フランス)

「連帯 (パートナーシップ) 経済の性質 交換におけるコミュニケーション的 トランザクションおよび社会関係」

[地域間比較セッション]

1. アフリカと東南アジア

座長：ディオグラティアス・F・ルタトーラ

(1)池谷和信 (国立民族学博物館)

「狩猟・採集民の生活様式の地域間比較 アフリカと東南アジアの間」

(2)嶋田義仁 (名古屋大学)

「アフリカと東南アジアの比較 乾燥地文明の視点から」

(3)鶴田 格 (近畿大学)

「アフリカと東南アジア 比較文明論の立場から」

2. タイの村落経済

座長：津村文彦 (福井県立大学)

(1)ポーパン・ウイヤーノン (スコータイ・タンマティラート大学, タイ)

「農から企業へ タイ中部地方における村落経済変化の諸相」

(2)ポーンピライ・ラートウィチャー (Pornpilai Lertvicha, タイ・リサーチ・ファンド, タイ)

「チェンマイ高原におけるコミュニティ経済ネットワーク形成」

3. 日本の農村社会

座長：阪本公美子 (宇都宮大学)

(1)池上甲一 (近畿大学)

「日本農民の水田稲作をめぐる倫理的
枠組み」

(2)末原達郎(京都大学)

「個人、社会そして共同体 日本の
農村社会における大転換」

[総合討論]

座長：ゴラン・ハイデン(フロリダ大学、アメ
リカ)

3日目：10月9日(月)

於：今立もくせい会館(越前市)

[アフリカセッション]

1. アフリカにおけるモラル・エコノミーの現
代的諸形態

座長：池谷和信(国立民族学博物館)

(1)松村圭一郎(京都大学)

「富の転換 現金が贈り物か エチ
オピア高原におけるモラルリティをめぐ
る交渉」

(2)藤本 武(人間環境大学)

「『モラル・エコノミー』に埋め込まれ
た作物の多様性 エチオピア南西部
山岳部農民マロの事例より」

(3)中山節子(京都大学)

「場所づくりとしての経済 マラウ
イ湖漁撈における都市ノ農村の二項対
立」

(4)小川さやか(京都大学)

「路上商人の生計戦略にみられる平等
性と自立性 タンザニアの対路上商
人政策と『捕捉されない』商人を事例
に」

2. アフリカにおけるモラル・エコノミーと開
発

座長：デボラ・プライソン(オクスフォード大、
イギリス)

(1)壽賀一仁(日本国際ボランティアセン
ター)

「AZTREC (Association of Zimbabwe
Traditional Environmental Conservation-
ists) に見るモラル・エコノミーの現代
化」

(2)徳織智美(北海道大学)

「企業間リンケージを介した中小企業
の成長に関する『埋め込み』アプロ
ーチを用いた一考察 ブルキナファソ
土木建設業の実証的研究」

(3)高橋隆太(京都大学)

「農村開発における互酬性 セネガ
ル河下流域における農民組合の実践
」

(4)阪本公美子(宇都宮大学)

「モラル・エコノミー、貨幣経済、ジェ
ンダー」

(5)マルク・アンベール(レンヌ第1大学 -
PEKEA, フランス)

「アフリカにおけるPEKEA 個人
と社会」

4日目：10月10日(火)

エクスカージョン(越前市)

次にプログラムの内容を時系列に沿って詳述
する。紙面の都合上すべての報告者の内容を網
羅することは不可能である。よって1日目の基
調演説の2名および、基調講演者のうち論文を

配布した2名を中心に内容を紹介し、2日目以降は各セッションの概略を述べるにとどめる。

各セッションの内容

1. 基調演説

基調演説では、アフリカ・モラル・エコノミーの現代的パースペクティブを論ずるにあたり必要となる2つの枠組みが提示された。ひとつはデボラ・ブライソンによる現代アフリカの人文地理的位置づけであり、もうひとつは西川潤による代替経済理論の提示である。

(1) デボラ・ブライソン

ブライソンは地理学的観点から、東南アジアとサハラ以南のアフリカにおけるモラル・エコノミーをめぐる大陸間比較の枠組みを提示した。1950年代には両大陸において小農が人口の大半を占めていたが、その後アジアでは輸出志向の工業化と農業の商業化が進み、生活水準も向上したのに対し、アフリカでは依然として経済が停滞し、貧困化が進んでいる。東南アジアの繁栄とサハラ以南のアフリカの貧困を分けたものは何であったか。ブライソンは小農の生業上の制約、政策の違いや民族間関係などから比較を展開した。最後に両地域においてモラル・エコノミーの特質が異なることを示唆し、それらの特質がモラル・エコノミーから市民社会への移行を促進しめすれば阻害しめすることを指摘した。

(2) 西川潤

第2次世界大戦後の開発の初期段階において、もっとも重視されていたのは生計維持倫理である。しかし1970年代以降に経済成長が偏重されるようになり、開発の倫理的側面はなおざりに

されてしまった。その帰結として、グローバリゼーションとともに南北の経済格差が増大し、自然環境と人的環境の劣化が加速するという事態が進行している。西川は、これらの現代的課題にとりくむにあたり、物質的富の無限の追求よりも精神的富に注目したモラル・エコノミーの復権を提唱した。そのうえで、旧来の生計維持倫理の再評価では現状に対応しきれないと考え、演説では代替経済に関する3つの理論、すなわち「内発的發展」、「国民総幸福量」、および「社会的経済」を検討した。さらに西川の本シンポジウムにおける貢献は、たんなる代替理論の提示に留まらない。欧米およびアフリカからの参加者にとっては馴染みのうすい、仏教思想や日本の研究者の仕事、および南米の事例を用いつつこれらを説明したことにより、シンポジウム全体の視程の拡大に貢献したといえる。

2. <シンポジウム> アフリカ・モラル・エコノミー論をめぐる現代的パースペクティブ

午後のシンポジウムは、基調講演3名およびコメンテーター1名、パネリスト2名という構成であった。基調演説で提示された枠組みをうけつつ、アフリカ・モラル・エコノミー論の特質を東南アジアとの比較の視点から検討した。2名は本シンポジウムの報告者の大半の研究内容を把握したうえで、3年間の本プロジェクトの成果を総括する報告内容となった。

(1) 基調講演

ここでは本プロジェクトの中心メンバーであり、論文の提出があった2名の報告を中心に紹介する。

(1) ゴラン・ハイデン「情の経済とモラル・エコノミー 我々は何を学んだか？」

本プロジェクトの成果を、情の経済およびモラル・エコノミーにつらなる理論的系譜のなかに位置づけたうえで、その現代的意義を評価するとすれば、情の経済概念の主唱者であるハイデン自身によるレビューを参照するのが最適であろう。よって本稿ではハイデンの基調講演にやや多くの紙幅を割いて紹介したい。

ハイデンは最初にモラル・エコノミーおよび情の経済の両概念をめぐる3つの潮流をたどり、それらの特性を社会と個をめぐる諸理論との関係から独自に分析した。彼が提示するひとつめの流れは、小農の生計維持倫理に注目したスコット [Scott 1976] から東南アジア研究者達のものであるが、アプローチとしては構造主義的であり、受動的な小農表象を産み出したと分析している。次に彼はK・ポランニー [Polanyi 1957]、グラノヴェッター [Granovetter 1985]、セイヤー [Sayer 2004] らを中心とした、産業化の進んだ欧米社会を対象とした諸研究をとりあげる。ここでの主題は経済と社会の埋め込み関係にあるが、ハイデンはそれをモラルとエージェンシーの埋め込み関係として再解釈した。ポランニー (1957) の「大転換」以降の論者による、資本主義経済における経済の社会への埋め込みの再評価は、モラルのエージェンシーへの埋め込みの確認でもあり、資本主義経済へ適応する個の表象を可能にするというのである。最後に彼はメイヤスー [Meillassoux 1964; 1975]、コピトフ [Kopytoff 1987] およびハイデン (1980) 自身によるアフリカを対象とした社会人類学および経済人類学をとりあげる。彼はここではモラルがエージェンシーに内在するものとして扱われると論じている。ハイデンによれば、最初の2つのグループによるモラル・エコノミー概念は国

家や市場への代替秩序の表象において有効であるが、彼自身による情の経済は、それらに捕捉されない個による社会的創造性の表象を可能にすることからより射程が広いということになる。両概念ともに互酬性規範およびインフォーマルさという共通項をもつが、情の経済のほうがよりインフォーマルな制度の分析に適しているという主張である。

そこから彼は独自のインフォーマル制度論を展開し、情の経済を基礎となる互酬の関係の質から4つに分類した。すなわち関係の排他性、包括性、および垂直性、水平性という2本の対立軸を設定し、生じた象限にクライエンテリズム (排他的, 垂直的), カリスマ (包括的, 垂直的), プーリング (排他的, 水平的), 自衛 (包括的, 水平的) の4つのカテゴリーを設けた。つづいて本プロジェクトのメンバーによる研究を、カリスマを除く3つの象限に分類しつつ紹介した。今後アジアとアフリカのモラル・エコノミーおよび情の経済概念の比較を進めるにあたっては、これらのインフォーマルな制度とフォーマルな制度との関係の分析が有効であると指摘した。

(ロ) 杉村和彦「アフリカ小農とモラル・エコノミーの歴史的位相」

本プロジェクトの代表者である杉村の基本的立場は「はじめに」と「概要」から明らかである。さらに基調講演に現れる彼の主張をここに簡単に要約したい。杉村によれば、日本の小農共同体が「生産の共同体」とよべるのに対してアフリカのそれは共食を主軸とした「消費の共同体」である。この傾向は情の経済によって支えられ現金経済の浸透後も維持されているという。彼はアフリカと東南アジアのモラル・エコ

ノミーの違いを互酬性の質から検討した。結論としては東南アジアのモラル・エコノミーにおいてはサーリンズ [Sahlins 1972] のいう均衡的互酬性が中心的であるのに対し、アフリカのモラル・エコノミーでは一般的互酬性が非常に強いと主張した。

(2)コメントおよび討論

コメンテーターの北原はモラル・エコノミー論の基礎をなす共同体モラル概念の有効性を問うた。近年の共同体論は実体としての共同体の衰退とともに、経験論よりも規範論に焦点が当てられている。モラル・エコノミー論もこのような傾向をもつことを確認したうえで、彼が提示したコメントは「モラル・エコノミーの規範論的側面が市民社会において説得力をもちうるか」および「モラル・エコノミーの機能性は歴史的件に依存するのではないか」という2点である。

以下、総合討論における主要な指摘をいくつか整理する。ブライソンから杉村へは、アフリカの小農に対する本質主義的表象のもつ危険性が指摘された。そのような表象のもとでは、東南アジアとアフリカにおける農業への投資政策の時間的格差など、さまざまなマクロレベルの要因が覆い隠されてしまうというコメントである。また、嶋田は杉村に対し、アフリカ小農にも地域差があることから、それらを一枚岩的に扱うことの不適切さを指摘した。さらには資本主義経済にもモラルが内包されており、国家権力のもとでそれが施行されていること、および今日の世界経済の形成にあたっての植民地主義の果たした役割を看過すべきでないとは批判した。

フルヴィルからハイデンと北原の両者へは、資本主義がモラル・エコノミーを必然的に破壊

するとするテレオロジーに対する批判が向けられた。彼の立場からはモラル・エコノミーは資本主義および市場経済による破壊がなされた後に残るものだけということになる。ハイデンのモラル・エコノミーと情の経済の定義に関しては、資本主義との埋め込み関係とその程度が問題になるのであるが、その判断基準があいまいでわかりにくいという指摘がなされた。

3. PEKEAセッション

本シンポジウムでは、フランスのレンヌ第1大学のPEKEA (Political and Ethical Knowledge on Economic Activities) より、3名の研究者を招聘している。2日目の冒頭のセッションではそのうち2名から、ラディカルな問題提起がなされた。フルヴィルは経済および社会的発展における課題は政治に端を発しており、国家および国際的な法体系の再定義から取り組まなければならないことを鋭く指摘した。また、ルノーの連帯 (パートナシップ) 経済論は、交換論を個でもなく社会的全体でもなく二者を出発点とする連帯関係から再理論化しようとする意欲的なものであり、今後の進展が大いに期待された。

4. 地域間比較セッション

2日目の残りのセッションは、モラル・エコノミーを地域間比較の視角から理論的に考察する目的で組まれた。ここでは、比較の軸をアフリカと東南アジアにおき、両地域におけるモラルエコノミーにかかわる問題群 (生業形態、農村経済、宗教、国家など) を、人類学、歴史学、経済学などの観点から考察することによって、比較のための枠組み・方法論を模索した。

(1)アフリカと東南アジア

アフリカと東南アジアについて、生活様式、生態環境、宗教、生態史などに注目しつつ、比

較文明論的立場からの報告がなされた。本シンポジウムの視座である大陸間比較をもっとも精緻に展開することにより、引き続き各地域からの報告を位置づける基盤を提供した。

(2) タイの村落経済

タイの村落経済の変容を農民層分解および地域経済ネットワーク形成の視点から分析した報告があった。東南アジア地域についての貴重な事例報告であっただけでなく、研究とNPO実践という二重の立場からの、深い当事者意識と理解にもとづく発表であったことを特記したい。

(3) 日本の農村社会

モラル・エコノミーを比較文明論的視角より論ずる際に、日本の研究者にとって無視できないのが日本の稲作農村に関する蓄積である。池上は農村における倫理的枠組みを水利用の観点から紹介し、末原は日本の農村変容について、イエ概念を軸に論じた。

5. アフリカセッション

3日目はアフリカに関する、一転してミクロな事例に基づく報告が中心となった。

(1) アフリカにおけるモラル・エコノミーの現代的諸形態

経済人類学・民族植物学など異なるサブ・ディシプリンと、都市・農村・漁村などさまざまな生活環境および生業様式にまたがる実証的研究報告がなされた。ミクロな交渉の現場を中心とする事例に立脚しつつ、われわれがモラルあるいは経済とよぶものの構築過程を問う意欲的な報告が目立った。

(2) アフリカにおけるモラル・エコノミーと開発

アフリカの開発の現場に即した、開発経済学・経済人類学・開発とジェンダー論などの立

場からの実証研究の報告がなされた。タイのセッション同様、研究と開発実践の両方に携わる報告者があり、モラル・エコノミー概念の開発における言説や実践のレベルでの有効性が検討された。

今後の課題

本シンポジウムの最大の功績は、モラル・エコノミーという概念に連結しうる幅広い論者を集めることに成功したことであろう。1日目の総合討論で出された忌憚なきコメントにあらわれるように、各論者はモラル・エコノミーの定義はもとより、社会と個の関係、歴史認識など実に様々な点でラディカルに立場を異にしている。筆者の意見は1日目の総合討論の場でほとんど出尽くした感があるが、ここで手短かに整理しておく。

アフリカと東南アジアのモラル・エコノミー比較のうえで、多くの分野からの議論が参照されるなかで、惜しむらくは、代表的論者であるスコットをはじめとする政治学からの議論がほとんどなかったことである。

ハイデンがこだわったインフォーマル性とは「フォーマルなるもの」の残余であるが、そこで想定されている「フォーマルなるもの」の代表は成文法にもとづく近代法治国家とそれが支える資本主義経済の諸制度である。インフォーマルなるものの偏在性を主張するまえに、フォーマルなるものが誰によっていかに創られ、輸出され、同時にインフォーマルなるものを定義しつつ意図的に周縁に押し出していったのかということを考える必要がある。そうすれば彼が想定するインフォーマルなるものもまた、国家や

市場にしっかりと捕捉されていることが明白になるのである（筆者報告）。インフォーマルなるものの地域間比較を行うとすれば、北原や嶋田が主張するような、植民地主義を含む歴史的プロセスに注意を払うことが不可欠であるし、フルヴィルがいうように近代法秩序そのものを問わざるを得なくなる。つまりフォーマルな枠組み越しにインフォーマルなるものを眺めている限りは、枠組みは所与のものとして視界から消えてしまうのである。真に代替経済を構想するならば、「枠」の外からそれを眺める作業も必要であろう。本シンポジウムにおける若手研究者の報告に多くみられたミクロなレベルでの実証的な研究は、そのような視座を醸成するのに不可欠なアプローチであり、今後の進展が期待される場所である。こうして概観すると、スコットが有名なモラル・エコノミー論 [Scott 1976] や抵抗論 [Scott 1985] の後に *Seeing Like a State* [Scott 1998] を著したことは、上の批判を踏まえれば当然とさえ思えてくる。ハイデン(1980)が情の経済概念を発表して以来、本シンポジウムにおいて再理論化を試みているように、スコットらによるモラル・エコノミー研究もその後再検討を重ね、本企画のちょうど1年前、米国の主要な人類学雑誌で特集を組んでいる [Scott 2005]。次の機会にはぜひこちらの流れとの連携も行いたいところである。

しかし繰り返しになるが、これだけ理論的背景の異なる研究者があつまり、始終和やかなムードのもとに討論が行われることこそまれなことである。本研究プロジェクトが3度にわたる国際学会を無事成功させ、国際学会の設立にまで至ることができたのも、代表の杉村氏をはじめとする中心メンバー達の熱意と包容力ある

人柄に負うことが大きい。それは期間中を通しての会場周辺の今立「コミュニティ」の方々から、本シンポジウムへの温かなご理解とご支援に触れるにつけ実感するところであった。またここで形成された新たなネットワークを利用して参加者が学会やシンポジウムで再会する機会が、開催後2カ月足らずの間に筆者が知る限りで3件続いている。本シンポジウムの目的のひとつが研究者のネットワーク形成であったことを考えても、おおいに盛会だったといえよう。

（注1）第1回国際会議の成果は、以下の雑誌の特集号に刊行済みである。G. Hyden et al. 2004. "African Economy of Affection." *Tanzanian Journal of Population Studies and Development* Special Issue 11 (2).

また、第2回国際会議の成果は、*African Studies Quarterly* (Univ. of Florida) の特集号として掲載が決定されている。

文献リスト

- Granovetter, M. 1985. "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness." *American Journal of Sociology* 91 (3) 481-510.
- Hyden, G. 1980. *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and an Uncaptured Peasantry*. Berkeley: University of California Press.
- Kopytoff, I. ed. 1987. *The African Frontier: The Reproduction of Traditional African Societies*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Meillassoux, C. 1964. *Anthropologie économique des Gouro de Côte Ivoire*. Paris/La Haye: Mouton.
1975. *Femmes, Greniers, Capitaux*. Paris: Maspero.
- Polanyi, K. 1957. *The Great Transformation*. New York: Basic Books.

Sahlins, M. 1972. *Stone Age Economics*. New York: Aldine de Gruyter.

Scott, J. C. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven, CT: Yale University Press.

1985. *Weapons of the Weak*. New Haven, CT: Yale University Press.

1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. New Haven, CT: Yale University Press.

2005. "Afterword to 'Moral Economies, State

Spaces, and Categorical Violence.'" *American Anthropologist* 107 (3) 395-402.

<インターネット>

Sayer, A. 2004. "Moral Economy."

<http://www.lancs.ac.uk/fss/sociology/papers/sayer-moral-economy.pdf>

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
 研修員)